

新年のご挨拶

北海道森林管理局长 新島 俊哉

令和二年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年も我が国は自然の猛威にさらされました。東北、関東、中部地方を襲った台風19号による豪雨は、河川の氾濫、山地の崩壊といった災害をもたらしました。

この度の災害によりお亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の誠をささげるとともに、被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。

また、今年は、民間事業者が一定区域の国有林の立木を一定期間・安定的に伐採できる樹木採取権制度を開始します。これは、民有林の新たな森林管理システムを補完するものであり、国有林としましては、所期の目的が達成されるようしっかりと取り組んでまいります。

ここ数年、毎年のように全国各地で記録的な大雨を観測しています。例えば、

昨年の台風19号がもたらした雨量は、千曲川上流域では一〇〇年に一度、阿武隈川上流域では四七〇年に一度の雨量に相当するものでした。この記録的な降水量によって、我々は、改めて山腹崩壊だけでなく、大量の水そのものがもたらす災害の恐ろしさを認識させられたところ です。このような大雨がもたらす災害が頻発するようになった中で、戦後造林した森林が資源として利用できる時代を迎えました。

しかし、人工林の年齢構成が、11 齢級(51〜55年生)をピークとする釣鐘型の分布をしていることが問題です。なぜなら、仮にボリュームゾーンである11 齢級前後の人工林を一気に伐ってしまった場合、公益的機能が一気に低下し昭和20年代から30年代にあったような大災害のリスクが高まることとなります。また、再造林したとしても次の利用期までには50年以上の長期間

を要するため、再び林業の低迷期が訪れるとともに、木材産業にとっては、原料確保の観点から将来的に大きなリスクとなります。

このように森林は「経済財」としての側面と地域の環境を守っている「環境財」としての側面があります。利用期に達した森林を単なる「経済財」であるという認識で一気に伐ってしまうのではなく、公益的機能の発揮に配慮しながら、「環境財」として、バランスがとれた状態で保全することにより循環利用することによって、次の世代にしっかりと受け継いでいくことが重要です。

そのため国有林としては、かつて北海道にあったような針葉樹と広葉樹が混交した百年から二百年生の森林を育てることにより森林の有する公益的機能を発揮させるとともに、「多様な樹種や多様な大きさの木材が毎年一定量出材する」とい

う国有林にしか出来ない森林づくりをしていくこととしていきます。また、長伐期化を進めることにより出材する大径材の原木を建築材へ利用拡大することによる高付加価値化を推進し、釣鐘型の樹齢構成の平準化を図ります。

更に、新たな技術の導入にはリスクを伴うことから、まず国有林がいち早く取組み上手くいったらその技術を民有林の皆様へすべて還元していく等、地域の林業、木材産業の発展に貢献していく所存です。

今年は、これらの取組について「見える化」をキーワードに民有林の皆様と連携しつつ事業を進めていきたいと考えています。

結びに、本年が森林・林業・木材産業の飛躍の年となりますとともに、皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

